

# 阪大NOW

地域に生き世界に伸びる

No.101  
2008

1

月号

年頭所感

## 「大阪大学の新世紀」 大阪大学総長 鷺田 清一

インフォメーション

第1回大阪大学・京都大学・神戸大学連携シンポジウム



大阪大学広報誌

## 大阪大学の新世紀

みなさま、新年明けましておめでとうございます。

昨秋の、大阪外国語大学との統合という、新制大阪大学の設置以降、最大の組織改革を経て、大阪大学はいま新しい歴史を刻もうとしています。

大阪大学の新世紀、それをわたくしは、大阪大学の原点に力強く立ち返ることととらえています。大阪大学の原点に立ち返り、そして大阪大学ならではのスタイル 《阪大スタイル》 で、教育・研究・社会貢献という、大学が果たすべき三つの社会的責任を、全構成員一丸となって果たすということです。



原点に立ち返るとはどういうことでしょうか。「地域に生き世界に伸びる」をモットーとして掲げる大阪大学にとって、懐徳堂と適塾を精神的な源流とすることは、創立の歴史的経緯を超えた深い意味をもっています。市民に広く開かれた学問所であるとともに、当時の世界の先端の知に深くふれていた懐徳堂と適塾の精神を現代に活かすことが、社会の 知 の機関としての大阪大学の未来を指し示しています。大坂の町人が生んだあの自由な研鑽の場を、ここ大阪大学にふたたび花咲かせるために、わたくしたちの先輩たちは懸命な努力を続けてきました。教育と研究と社会貢献の質を比類のないレベルにまで高めること、このもっとも基本的な努力に大阪大学の将来は懸かっています。世界トップレベルの研究、すでに大阪大学の伝統となっている未知の融合研究領域の創出、「教育の阪大」とまで言われるようになった教育熱心な校風、大学院レベルでの教養教育の重視、産学連携と社学連携の両輪で進む活発な社会貢献など、大阪大学が近年とくに力を入れてきた特色ある教育・研究の活動を、大阪大学はいま、《阪大スタイル》として確立させる時期にきています。国家のためだけの大学でも、研究者のためだけの大学でもなく、一歩も二歩も時代の先を見据えながら、市民・企業・社会と深く連携して、時代を切り拓いてゆく大学、それが大阪大学のめざすべき 知 のスタイルだとわたくしは考えます。

ところで大阪大学の新世紀を漕ぎだすにあたって、その船の航行には、キャプテンも要れば、航海士も要ります。漕ぎ手も要れば、機関を調整する整備士も要ります。通信士も要れば、調理師、清掃係も要ります。みなが一丸となってはじめて、船を無事に、そして力強く航行させることができます。

思えば四年前、大阪大学は学問の神様である天満宮の祭、天神祭に「阪大船」を進水させました。そのとき乗船者を「オール阪大」にしました。総長と元総長、理事、経営協議会委員、名誉教授、事務職員OB、現教職員、学生・院生に留学生、同窓生、それに後援会の役員、PTAのみなさま、応援団、大学担当記者、さらにそのご家族……と、それはまるで「ノアの方舟」のようでした。この一丸というのを、今後の大阪大学の運営においても大切にしたいと思えます。

## 三つの合い言葉を - - 阪大スタイル の形成に向けて

大学は、学生と教員と研究員と事務・技術などの職員とでなりたっています。大阪大学というフラッグの下、そのそれぞれがそれぞれにきらきら輝いていること、それがわたくしの夢みるところであり、在任中になんとしても実現したいことです。

学生諸君には「イカ阪」などといううれしくない呼称など押し返して、「モテ阪」という、社会から囑望される人材として育ててほしいと思います。「阪大で勉強した学生はどこか違う」と言われるような人物になってほしいと思います。

大阪大学は平成 16 年の法人化後、三つの教育目標を掲げてきました。

教養 (critical thinking)

デザイン力 (synthetic imagination & good sense)

国際性 (transcultural communicability)

を育むということです。この教育方針を貫くために、大学教育実践センター、コミュニケーションデザイン・センター (CSCD)、グローバルコラボレーションセンター (GLOCOL) という教育機関を順次、設置してきました。まだ全学の隅々にまで浸透しているとはお世辞にも言えませんが、少なくともこれらの教育プログラムを受けた学生諸君の眼は、確実にきらめきだしています。「阪大にこんな面白い場所があったのか、それを知らずに過ごした時間が惜しい」という感想を、わたくしははじかに何度も耳にしました。教養とデザイン力と国際性を育むなかでいまの大阪大学の教育がめざしたいのは、「社会から厚い信頼の寄せられる研究者・高度専門職業人」の養成です。

研究については、法人化後、「インターフェイスとネットワーク」ということを阪大の目標として設定してきました。時代の要請に応えるべく、つねに機敏に新しい研究のシフトを敷くことができるということ、そのために異分野の研究者のあいだ、企業とのあいだに、クモの巣のように緊密なネットワークを張るとするのがその心です。これに加えて、わたくしは、教育とならび、研究にも三つの目標を設定したいと思います。

基本 (basic)

ときめき (exciting)

責任 (responsible)

目の前の効用や有用性ととらわれることなく基礎研究を大事にすること、「おもしろくておもしろくてたまらない」と心底言えるようなわくわくする研究をすること、そしてみずからの研究が社会のなかでどのような位置にあるかを冷静に見つめうることの三つです。

そして職場としての大学について。ここでは、

やりがい (mission)

発案 (proposal)

思いやり (thoughtfulness)

ということがなにより大事だと思っています。自分がやっていることがこういう大きな意味をもっているという自覚なしに仕事には打ち込めません。上から指示されたこと、習慣としてそうなっていることに諄々と従うだけでは、みずからやる気を失うばかりです。組織の思いきった改善もありえません。さらに、同僚の仕事ぶりのその背景にあるものへの想像力がなければ、支えあいも協働もありえません。

阪大の職員は、阪大職員である前にまずは、いろんなことを夢見もすれば、またひどく悩み、落ち込みもする、まぎれもない生きたひとりの人間なのです。その一人ひとりの人間がやる気をなくすような組織運営だけは、絶対にしてはなりません。



新年の総長挨拶 (1月4日)

## 大阪大学がまっさきに取り組むべき三つの課題

教育における教養とデザイン力と国際性の涵養。研究における基本とときめきと責任。職場におけるやりがいと発案と思いやり。これらを大阪大学に浸透させるためには、かけ声だけでは足りません。それを実現するプロセスというものを、具体的に描く必要があります。

昨年8月に発足した阪大現執行部が、そのためにいま取り組んでいること、検討していることを、以下に報告させていただきます。これは国立大学の法人化後、ほぼ四年経ったいま、その体制をあらためて検証するなかで、いまの大阪大学にとってもっとも必要な事業、もしくは改革として、現執行部がめざしていることです。

大阪大学を構成するみなさまも気づいておられるように、問題はとにかく山積しています。

まずは、「効率化係数」(大学)や「経営改善係数」(附属病院)というかたちで迫られている予算の縮減です。人件費削減と業務量増大とのジレンマをどう解決したらよいのか。運営費交付金削減が続くなかで、財務の長期的な展望を描く必要があります。それとともに、大阪大学の事業を支える財務基盤の整備を、外部資金・未来基金をはじめとして、あらたに模索する必要があります。とくに基金事業や寄附の要請は、部局ごとに個々ばらばらに進めるというよりは、全学シフトでより効果的に取り組むべきものであり、その体制をいま、財務・会計室や研究推進室を中心に構築していただいています。

次に問題なのは、学内の意思疎通です。法人化後、それまであったさまざまな全学委員会を縮小ないしは廃止し、大学の業務を、総合計画、教育・情報、研究推進、評価・広報、財務・会計、人事労務の6室と、国際交流の1本部に集約してきました。それによって組織のスリム化はたしかに実現しましたが、すべての情報が教育研究評議会と部局長会議という狭い通路を経由してしか流れなくなりました。大学の執行部が意図しているところと、現場の教員・職員、そしてなによりも学生・院生諸君の意識とのあいだに、十分に情報が伝わらないという状況が発生しだしています。同じ情報ギャップは、大学と社会とのあいだにも生まれていて、大学が志しているものが社会にうまく伝わっていないというもどかしさもあります。阪大の広報のもっとも重要な媒体であるホームページも、他の機関と比べて充実しているとはとても言えない状況です。こうした状況を打開するために、これからは大学の広報活動を、学内外ともにすみやかに重点的に整備したいと思っています。その第一歩として邦文・英文のホームページの格段の充実、学内各所への電子掲示板の設置、広報誌面のリニューアルに取り組むとともに、社会に向けての広報体制の強化を図ります。

また、昨年10月より、総長・理事・監事による週1回の「部局回り」も開始しました。学内の教育・研究の現場を回り、当該部局が抱えている“夢”(将来構想)をもっとも力を入れている研究内容、そして組織としていまいちばん困っていることを聴かせていただいています。法人化・第一次中期計画事業の検証をし、次期の中期目標・中期計画の策定に取り組むにあたって、まずは大学本部と学内各部局との徹底した対話のなかで押し進めてゆきたいという思いからです。

キャンパス整備という課題も、いまの大阪大学には大きくのしかかっています。時代をリードするような先端的な研究開発と優れた人材の育成に取り組むには、そのためのスペースがまだまだ不足しています。老朽化した施設や小さな建物がキャンパスに乱立するなか、施設の有効活用と新たな施設整備の長期的なプランを全学的な視点に立って作成する必要があります。

再度確認しますと、財政基盤の整備、広報体制の強化、キャンパス整備、これら三つの課題に取り組むため、総長をリーダーとし、担当理事・総長補佐、そして教員・職員が一丸となった全学的な推進体制を早急に構築したいと思っています。

大学運営の本体である室体制については、現在、法人化後4年間の経験を踏まえ、検証と見直しをしています。本年度内に、基本は大きく変えませんが、より機動的なものへと改善した新体制をみなさまにお示しします。

# 大阪大学創基284年

## - - 大阪大学21世紀懷徳堂の創設と国際化の推進

大阪大学が、全国から、そして世界から、優秀な研究者とやる気のある学生を集めることができるためには、大阪大学が輝かしい実績を着実に積み重ねるとともに、大学発祥の地、大阪という都市と、大学がいまある北摂という地域そのものが魅力のあるものにならなければなりません。最初にものべましたが、大阪大学の精神的源流が近世の懷徳堂と適塾にまで遡れること、このことを阪大人はもっと誇りに思うべきです。大阪帝国大学の創立から数えて、今年で77年目を迎えますが、懷徳堂の創設から数えれば284年になります。そう、創基284年の歴史を大阪大学はもっているのです。



「書生<sup>まじわり</sup>の交は貴賤貧富を論ぜず、同輩たるべき事」と壁書に記された懷徳堂は、大坂の5商人によって設立され、やがて徳川幕府官許の学問所となりますが、その頃大坂の町には、近松門左衛門をはじめとする人形浄瑠璃が華やかに演じられていました。その後には、井原西鶴や上田秋成らによる文藝も花咲きました。大坂はまさに“国際学芸都市”だったのです。

緒方洪庵が開いた北浜の蘭学塾、適塾には、全国から三千人もの若者が集まってきました。学問をするなら大坂、といわれ、江戸からも多くの若者がやってきました。そして類を見ない勉学の厳しさのなか、「明治日本の青春」(駒敏郎)はこの塾から巣立っていったのです。

近世大坂のこの学問と芸術の息吹を、大阪という都市は21世紀に蘇らせなければなりません。そしてこの二つの学問所を源流とする大阪大学は、大阪の学芸と市民文化の復興を積極的に担ってゆくべき立場にあります。

このような思いは、「地域に生き世界に伸びる」という現在の大阪大学のモットーにも込められています。このモットーをさらに実質化してゆくために、大阪大学は、大阪府民・市民との、在阪企業との、関西圏のワーカーとの、さらには地道に文化支援に取り組むさまざまな文化財団・文化

NPOとの連携を強めていかなければなりません。大阪の学芸と市民文化の再興のために、大学が、近隣社会のさまざまなセクターと手を携えて多様な文化事業を推進してゆく、その取り組みを大阪大学では社会学連携と呼んでいます。企業とのあいだでこれまで活発に進めてきた研究連携・人材交流と、この社会学連携の両輪で、大学の社会学連携事業を推進してゆこうというのが、大阪大学の現在の姿勢です。在阪企業のCSR(企業の社会的責任)事業とパートナーシップを組むというのも、そのための有効な手だてとなるでしょう。その第一歩として、この4月に、「大阪大学21世紀懷徳堂」を設置し、豊中地区のイ号館に事務局を置いて、社会学連携の活動を本格的に始動させます。「もしこの21世紀に懷徳堂が存在したなら、何をやっていただろう」とイメージしながら、いま大阪で取り組むべき事業を構想し、推進してゆきたいと思っています。

次に、「地域に生き世界に伸びる」の後半のほう、大学の真の国際化のための基盤と環境の整備にも、今後とくに力を入れたいと考えています。そのためにまず取り組むべきは、教育プログラム、とくに短期受け入れならびに派遣プログラムの拡充というかたちで、対外的なヴィジビリティを向上させることでありますが、そのためには同時に、キャンパスそのものの国際化(全学的なサポートオフィスの設置、英語の堪能な事務職員の各部署への適切な配置、そのための事務職員の研修、地域的サポート体制の構築など)を推進しなければなりません。これについては現在、国際交流推進本部が具体化のために動いています。

昨年は、秋に大阪大学にとってとてもうれしいニュースが飛び込んできました。Times Higher Education Supplement 紙の大学世界ランキングで、大阪大学は一昨年の70位から46位に大躍進しました。年ごとに評価基準の変更があり、順位に一喜一憂すべきものではありませんが、研究をはじめとする大阪大学の活動が高く評価されたことは素直に喜びたいと思います。これも、阪大全構成員の日頃のたゆまぬ研鑽と努力の賜物であり、関係各位には深く感謝いたします。大阪大学がきわめて高水準の研究・教育をおこなっている大学として、さらにその認知度を高め、その名にふさわしい存在となるためには、国内外から卓越した研究者が足しげく通い、共同で研究する大学でなければなりません。大学本部としては、そのための研究環境・宿舍の整備に、今後とも精一杯知恵を絞ってゆきます。

## アーティスティックな総合大学へ

### -- 膨らむ夢と、地味ながらも重要な改革事業



最後になりますが、大学本部の各室に、現在、最重要事項として検討をお願いしている事項について、列挙させていただきます。

総合計画室には、まずは次期中期目標・中期計画の立案のための体制づくりをお願いしております。また、教職員のより働きやすい職場環境をつくってゆくための様々な仕組みの検討もお願いしております。

教育・情報室には、外大との統合後の教育体制を順調に滑りださせるために、万全の対策を講じていただくようお願いしています。統合の真価は一に、多彩な専門教育と外国語教育とを組み合わせ、全国でも例のない国際性豊かな人材育成プログラムにかかっており、その一部始終をきめこまかに点検していただきます。また、全学的な学術情報基盤の整備（電子ジャーナル、学生の自習環境など）と大学院高度副プログラムの始動とを、これまでも力を入れてきた大学院の高度教養教育とともに、力強く推進するようお願いしております。

研究推進室には、競争的資金にかかわる新しい事務支援体制の構築をまず一番をお願いしています。競争的資金を獲得すればするほど当該部局の運営・事務負担が増大する構造をなんとしても改善したいからです。それとともに、産官学連携・知的財産管理の体制の再整備と強化に取り組んでいただいております。

評価・広報室には、より少ない労力でより多くの効果を得る評価システムにさらに磨きをかけ、来年度のいわゆる暫定評価に臨んでいただくようお願いしています。大学にとってもっとも重要な教育と研究という本務を削ぐことがないよう、室として厚い部局支援にあたっていただきます。また先にのべた広報体制の強化策の具体的な立案にあたっていただいております。また、法人化後の大学ではリスク管理がなにより大きな懸案事項として立ち上がってきておりますので、その確かな体制をどう組むかの計画づくりをこれからお願いします。

財務・会計室には、長期的な視野に立った財務戦略の立案をお願いしています。強化するべきところと省くべきところ、それを明確にしためりはりのある財務運営をおこなってもらうため、大局的な見地からこれまでの財務体制の見直しを図っていただきます。

人事・労務室には、少数精鋭で、先を見通して仕事をしてゆける事務体制の構築をお願いしています。仕事への心のこもった動機づけが得られるように、各職員にスキルアップのさまざまな機会（職員研修会の実施、大学とは異なる企業への研修出向など）を設け、いわゆる適材適所への抜擢を図るとともに、大学で働いていることを活かして、週一回、個人としての資質向上に努めるべく、それにぜひ必要と思われる講義に出られるよう、業務上の工夫をお願いしています。

社会学連携担当理事には、4月の始動に向けて大阪大学21世紀懐徳堂の設置準備とともに（評価・広報室と協力して）広報体制の強化策の立案をお願いしています。それと同時に、大阪大学の社会学連携事業の窓口を一本化する方策を練り上げてもらっています。

国際交流推進本部には、ワンストップサービスの本格始動、さらには海外からの研究者・留学生のための施設・環境整備と、地域と組んだ厚い支援体制の構築など、キャンパスの国際化のための体制の速やかな構築をお願いしています。

このほかにも、大学の融合研究のさらなる活性化のため阪大の「おもしろい」研究をさらにおもしろくするクラブの開設や、創立80周年に向けての記念事業の計画など、さまざまな構想が頭をよぎりますが、それについてわたくしなりの考えをみなさまにお諮りするのには、あらためて別の機会にしたいと思っています。

市民・企業・社会とともに歩む開かれた大学、デザイン感覚とグッド・センスと創造性が満ち溢れるアーティスティックな総合大学。大阪大学がそうした知の機関としてますます輝きを得るよう全力を尽くすこと、その決意を、年頭にあたり、みなさまにお伝えいたします。

平成20年1月4日

大阪大学総長

鷲田清一

## 大阪大学ホームページにて「総長からのメッセージ」動画配信開始



今月（1月）のタイトルは「みおつくし」です

1月から、本学ホームページ上（日本語版）において、鷲田総長によるメッセージの動画配信を開始しました。  
なお、本メッセージは、今後毎月掲載していく予定としておりますので是非ご覧下さい。

トップページの パナーからご覧下さい。

大阪大学ホームページアドレス：  
<http://www.osaka-u.ac.jp/>

第1回大阪大学・京都大学・神戸大学連携シンポジウム

- 関西から世界へ：三大学連携による「知」の創出と発信 -

このたび、大阪大学、京都大学及び神戸大学の三大学が連携し、世界に通用する高度人材育成を行い、関西の知的創造拠点の形成を目指して、国際シンポジウムを開催いたします。

このシンポジウムは、情報通信をはじめとした科学技術、文化、芸術等の振興に関する教育・研究事業を三大学が連携して実施することにより、卓越した研究者・技術者の人材育成に貢献し、関西地域の産業の発展と地域活性化に寄与することを目的としており、また、未来生活の課題とも言うべき様々な分野において、三大学連携により世界の「知」を集積し、社会への発信に取り組んでいきます。

第1回目の本年度は大阪大学が担当し、「情報科学」分野を対象とした大学間連携による高度人材育成に関するテーマを設定しています。

【テーマ】 - ソフトウェア技術者教育：期待と国際的な潮流 -

【日時】 平成20年2月27日(水) 10:00~

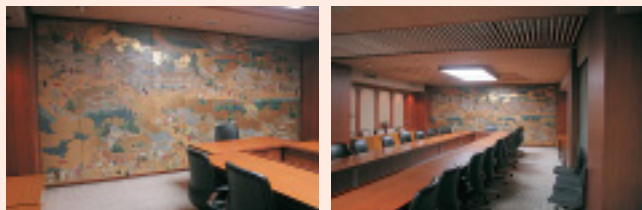
【場所】 大阪国際会議場特別会議室(12階) 大阪市北区中之島5-3-51

シンポジウムホームページ <http://www.3univ.jp/>

記念講義

平成20年3月31日限りで定年等により退職される教授の記念講義を、日程等が決まったものについてお知らせします。

部局(講座・部門等)	氏名	日時・場所	講義題目
文学研究科 (文化表現論専攻西洋文学・語学講座)	柏木隆雄	2月18日(月)14:30~16:30 附属図書館本館6階図書館ホール 場所変更による再掲載	メリメとバルザック - 19世紀小説の二面 -
文学研究科 (文化表現論専攻西洋文学・語学講座)	林正則	2月20日(水)16:30~18:00 附属図書館本館6階図書館ホール 場所変更による再掲載	ゲーテ『ファウスト』と象徴
工学研究科 (地球総合工学専攻建築構造学講座)	甲津功夫	1月29日(火)14:40~16:10 工学研究科GSEコモウエスト棟 6階U1W618	未定
工学研究科 (ビジネスエンジニアリング専攻技術知マネジメント講座)	鳴海邦碩	3月4日(火)15:00~16:30 工学研究科S4棟-111講義室	(仮)都市デザイン研究の展開
言語文化研究科 (言語文化比較交流論講座)	津久井定雄	2月22日(金)15:00~16:00 言語文化研究科棟2階大会議室	想像力の問題
言語文化研究科 (言語コミュニケーション論講座)	仙葉豊	2月22日(金)16:00~17:00 言語文化研究科棟2階大会議室	身の上相談と小説の起源
高等司法研究科 (法務専攻)	村上武則	1月30日(水)13:00~14:30 法経講義棟1階2番講義室	給付行政研究の道のり - 法治主義と人間の尊厳の確立を求めて -
レーザーエネルギー学研究センター (光・量子放射学研究部門)	西原功修	2月22日(金)15:00~ レーザーエネルギー学研究センター 研究棟4階大ホール	「プラズマと光と非線形性」



表紙写真：陶壁画「大坂市街図屏風」(事務局・301会議室)  
近世前期の大坂城下の人々の生活が描かれています。  
原図(158.3×332cm)は京都・林氏所蔵  
表紙デザイン：株式会社ココティエ

阪大NOW No.101 2008 1月号 2008年1月15日発行

編集・発行 大阪大学総務部評価・広報課 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-1  
TEL: 06(6879)7017 FAX: 06(6879)7166  
ホームページアドレス <http://www.osaka-u.ac.jp>

「阪大NOW」へのご意見、お問い合わせ、記事の提供等がありましたら、下記までお寄せ下さい。  
E-mail: [souhyokoukohou@ns.jim.osaka-u.ac.jp](mailto:souhyokoukohou@ns.jim.osaka-u.ac.jp)

